

2012年3月「生贄事件」の検証

——サンタ・ムエルテ信仰の虚像と実像

加藤 薫

▶▶▶ 「生贄事件」の報道と反響

2012年3月末、極めてショッキングなニュースが報道された。メキシコ北西部、アメリカ合州国と接するソノーラ州で、サンタ・ムエルテ（骸骨の聖母）と呼ばれる聖人を信仰する男女8人が、過去4年間に3人を「骸骨聖母に捧げる生贄」として殺害した容疑で逮捕されたというのだ。筆者は2007年頃からこの信仰集団と凶像の調査研究を行ってきたが、そこで収集した過去50年以上の情報（信者たちへの聴取や各種記録・文献・報道）の中で、このような猟奇的な事件に遭遇したことは一度もなかった。現地メキシコでも、「サンタ・ムエルテに人間を殺して捧げた初めての事例」として大きな波紋を呼んでいる。現在300万人はいるとされる信者たちの多くにとっても、おそらく晴天の霹靂であったはずだ。

信者たちはこの事件を機に、自分たちの信仰活動に対するさらなる偏見と誤解が増幅し、「カルト教団」とみなされることを何よりも恐れている。筆者はこの3月に『[骸骨の聖母サンタ・ムエルテ](#)』を出版したが、いうまでもなく、このような逸脱が生じることを予測していなかったし、ましてや信仰行為に名を借りたものであれ何であれ、殺人行為を是認するつもりはまったくない。現地の多くの信者たちと同様、事件の報にただただ驚いている。そこで、拙著の続報として、この事件のさしあたっての検証を試みたい。それによって、「カルト教団による猟奇的殺人事件」の報道と信者たちの実態との間に乖離があることをお伝えできればと思う。なお、警察による捜査は始まったばかりでもあり、今後新たな事実が明らかになることで、事件の様相が現在とは異なったものになる可能性もあることをお断りしておく。

▶▶▶ 事件の現場——縮小した鉱山町

「生贄事件」の発生した場所は、ソノーラ州の州都エルモシーヨ市から北に約250キロ離れた国道17号線沿いにある鉱山町ナコサリ・デ・ガルシアである。米国アリゾナ州南端のダグラス市からは100キロほどしか離れていない。17世紀から銅鉱山で発展し、1904年に鉄道が敷設されてからは州の北東地域でもっとも裕福な都市となったが、48年に銅の鉱脈が枯渇すると一気に衰退した。それが1968年、約40キロ南西に新たなラ・カリダー銅山が開発されると、その労働力供給地として再び発展し、89年には人口が3万人にまで膨れ上がった。しかし2000年

統計では、鉱山労働者約3000人、それに米国輸出向けの牛牧畜業者と各種サービス業に従事する人々で構成される、人口1万4000人程度の町に縮小している。小さな町ゆえ、住民の人間関係は濃密なものがあるだろう。州政府は新たな産業として観光業を推進しているが、鉱山労働と牧畜という産業構成から住民は荒っぽい生活に慣れており、平均すると生活水準が低く、あらゆる意味で明暗の落差が激しい土地である。残酷で野蛮だという理由からメキシコ各地で禁止されている闘鶏が、今でも男性の実利的娯楽として日常的に楽しまれているような町でもある。

▶▶▶メラス一家

殺人容疑で逮捕された8人の男女はメラス家の一族だ。一家は裕福ではなかった。主犯とされた女性シルビア・メラス・モレノ（44歳）が家をとりにきっていた。逮捕時の報道映像を見ると、彼女は放心したかのように「私って、なんてバカだったのかしら」と何度もつぶやいていた。

ほかの容疑者は次の通り（括弧内は年齢）。シルビアの夫エドアルド・サンチェス・ウリエタ（37）、ヘオルヒナ・グアダルーペ・バロン・メラス（20）とその夫マルティン・バロン・ロペス（48）、ラモン・オマル・パラシオス・メラス（28）とそのガールフレンドのソイラ・アダ・サンタクルス・シルビア（年齢不明）、フランシスカ・マグダレナ・バロン・メラス（21）、シルビア・ヤハイラ（15）。一部、互いの続柄は明確でない。

一家がいつごろからサンタ・ムエルテ信仰に入ったのか、現時点ではわからない。しかし、かれらの年齢や、サンタ・ムエルテ信仰が広範囲に流布したのが比較的最近である（詳細は拙著を参照）ことから考えて、おそらく21世紀に入ってからと推測される。

警察は町の二箇所にあるメラス家の住居と、町はずれの人気のない荒地——被害者たちの遺体が遺棄されていた——を捜査した。報道映像では、メラス家の荒れた敷地内に建てられたトタン張りの平屋の礼拝所が映っていた。映像には出てこないが、その内部にはおそらく祭壇が設けられ、骸骨聖母の聖像が祀られていたはずである。警察の捜査では、礼拝所内には30平米にわたって血が飛び散っていたという。

▶▶▶犠牲者たち

殺された3人のうち最初の犠牲者は、クレオティルデ・ロメロ・チャパロという名の55歳の女性（一時44歳男性との誤報道があり、混乱した）で、2009年9月頃から行方不明となっていた。遺骸は燃やされた後、毛布に包まれて山中に埋められた。警察が発見した時にはかなり白骨化していたという。検案と捜査の結果、容疑者らは彼女の背中を鉄斧で一撃して殺し、その血を容器に集め、死後に首や手足を刃物で切断したという。容器に集められた被害者の血は、主犯のシルビアがサンタ・ムエルテ聖像や祭壇の周囲に撒布した。シルビアは逮捕時、記者団からなぜクレオテ

イルデを「生贄」に選んだのか訊かれ、「彼女が魔女だと思ったから」と答えた。ロメロ家とメラス家は距離的に近く、被害者と主犯は親しい友人関係にあったという報道もみられた。ここからは推測だが、もしかするとある時点で、サンタ・ムエルテ信仰が親しい女友達の間にも亀裂を生んだのかもしれない。クレオティルデがメラス家の信仰を批判したため、シルビアの友情が憎しみに変わったのではないか。実際、信者と非信者の間にはそのような軋轢がしばしば生じる。だがいずれにせよ、後述するようにサンタ・ムエルテ信仰において「生贄の血」が捧げられるケースはこれまで報告されていないし、真の動機は不明である。

▶▶▶ 幼い少年の犠牲者

二番目の犠牲者は10歳の少年マルティン・リオス・チャパロ。最初の犠牲者クレオティルデの息子である。2010年の6月頃に行方不明となり、7月に捜索願が出された。マルティンの遺骸も発見時は毛布に包まれ、かなり白骨化し、やはり痛ましいことに手足がバラバラにされていた。検案の結果、少年の喉、腕、手首には数か所の切り傷が認められ、クレオティルデの時と同様、祭壇に捧げる血を抜かれたものとされた。少年の殺害後もなおメラス家の人々は、母子がたてつけに行方不明となり悲しみにうち沈むチャパロ家と近所づきあいをしていたという。

三番目の犠牲者は、テテという愛称で呼ばれていたヘスス・マルティネス・ヤーネスで、マルティンと同じく10歳の少年だった。時系列では最後の犠牲者だが、彼の遺体が見つかったことでほかの2人の殺害も明らかとなった。

テテの義父マルティン・イバン・バロン・メラスは、事件とは無関係だがメラス家の一員であり、容疑者たちは身内を手にかけたことになる。テテ少年は2012年3月6日の午後1時、小学校から帰宅の途についた後、行方がわからなくなった。家族からの捜索願を受けて、市警察と州警察が合同捜査に乗り出し、やがてシルビアたちの犯行であることが判明。遺骸はやはり手足を切り離され、毛布に包まれていた。そして前の2人と同じく、喉と両手首に血を抜きとられた痕跡があった。シルビアは2人の少年についても、「生贄」に選んだ明確な理由を述べていない。

3人の殺害において、メラス家内の役回りはおおよそ決まっていたという。血をサンタ・ムエルテに捧げる役はつねにシルビア。遺骸の手足などを切断する役は28歳の青年ラモン・オマルが担った。だが彼は記者団の質問に対して、「すべてシルビアの指示に従っただけ」と答え、主犯がシルビアであることを強調している。

▶▶▶ 事実と異なる報道

現地メキシコでも、日本を含めた外国でも、信者でない人々は今回の報道を見て、骸骨聖母の画像とセットされた形で、「やっぱりサンタ・ムエルテはカルトだ、怖い」という思いを抱いたかもしれない。しかし実際には事実と異なる報道もあったうえ、その背後にはメディアの操作性が介在し

ており、事実や実態を置き去りにした思考の短絡が生じているように思われる。

米国CNNの報道では、最年長48歳のマルティン・バロン・ロペスを一族の信仰の「司祭」と報じているが、これはサンタ・ムエルテ信仰の実態と合致しない。メキシコ各地にあるサンタ・ムエルテ信仰のコミュニティは、カトリックのような組織化はされておらず、信仰のセンターとしての「教会」も、「司祭」といった役職もない（コミュニティの主導者が象徴的な意味合いで「司祭」を自称するケースはあるが）。しかも、「生贄」の儀式を実質としりきったのがシルビアであることは、他の容疑者の供述からすでに明らかとなっている。

▶▶▶メディアの操作性

逮捕直後の報道映像では、シルビアを中心に8人の容疑者が整列させられた様子が映っていた。シルビアは額装したサンタ・ムエルテの平面聖像図を抱えている。色褪せた、かなり古そうな聖像図で、血痕のようなものも見あたらない。いったいなぜこのようなものを持たせるのか。本人が持ったまま連行されたいと言ったのか。殺人事件の容疑者の逮捕場面にしてはずいぶん芝居がかってはいないか——この映像にはまるで、「この容疑者はこの期に及んでも、サンタ・ムエルテ信者であることを誇らしげにアピールしている。何ら良心のとがめを感じていない」とでもいたげな底意がかいま見える。警察とメディアの結託によるイメージ操作が疑われるのだ。

メラス家にあったサンタ・ムエルテの図像はおそらくすべて鑑識に回されたと思われる。そのため逮捕後数日間のメディアの報道はどれも、「演出」目的で、事件と直接関係のないサンタ・ムエルテの図像を流した。報道ではつねに参考図像・映像を添えることが求められるが、そのさい良心的なメディアはできるだけ「事件と直接関わる絵」を使おうとするだろう。しかし、手に入らなければ「二次資料」ということになる。この行為が視聴者の意識を、事実や実態とは乖離した方向に向かわせてしまう場合もあることに注意したい。

▶▶▶サンタ・ムエルテ信仰に「生贄」の教義はない

筆者の信者たちとの交流の経験からみても、先に述べたように、今回の事件にたいしてメキシコ各地のサンタ・ムエルテ信者たちは驚愕し、胸を痛めているはずである。しかしいまのところ、信者が多いことで知られるメキシコ市テピート地区の信仰コミュニティをはじめ、信者集団から何らかの声明等が発せられた形跡はない。報道の過熱ぶりからして、かえって火に油を注ぐことになってはいけないうと、慎重に構えているのかもしれない。

筆者の知るかぎり、サンタ・ムエルテ信仰の教義に、「生贄」や「生き血」を聖母に捧げるべし、といった要素は皆無である。骸骨聖母は花やキャンディ、地酒や葉巻は喜ぶが、人間の血を望んでなどいないように思われる。そもそもサンタ・ムエルテは、望みを何でも叶えてくれる悪魔的な存在ではない。時空間を司り、人間の意思をジャッジする超越的な存在であると同時に慈愛に満ちた

母神であり、「生贄」などといった黒魔術的な要素を要求する聖人ではないのである。

アステカ帝国の時代、人間の心臓と血を太陽神に捧げる生贄の儀式が盛んに行われたことと結びつけて、今回の事件を「アステカの風習の復活」と論じる者もいる。しかし、そもそもソノーラ州をはじめメキシコ北部地域は、アステカ帝国の支配が及ばなかった辺境の地である。主に銅鉱山労働者として移住してきた人々で構成されるナコサリ・デ・ガルシアに、アステカの伝統や風習が根強く残っていたという可能性は極めて小さい。メラス一家がなぜ「生贄」という発想に至ったのか、不可解さは募るばかりだ。

▶▶▶ 麻薬ビジネスとの関わり

ここ数十年の傾向として、サンタ・ムエルテ信仰のメキシコにおける普及が麻薬取引業者の拡散と同時並行的に起きたことはほぼ疑いない。ただし拙著で詳説したとおり、サンタ・ムエルテ信仰は麻薬業者のカルトではない。

メキシコでは1980年代以降、米国との国境地帯などで、数十人以上もの遺体がまとめて路上やゴミ捨て場に放置されるという異様な事件がたびたび起きている。なかには、なにか怪しいカルト教団の儀式で「生贄」として殺害されたような痕跡が遺体に見られるケースがあった。しかし捜査の結果、犯行は当時激しい組織間抗争を展開していた麻薬業者たちによるもので、警察の目をそらすためにカルトによる猟奇事件を装ったものと判明。遺体は麻薬抗争の犠牲者であり、サンタ・ムエルテ信仰とは一切無縁だったことが明らかとなった事件もある。

ところが、一連の事件を契機に、マスメディアは「ナルコ-サタニコス（麻薬業者の黒魔術信仰）」というレッテルを作りだし、麻薬ビジネスとサンタ・ムエルテ信仰を結びつけようとしはじめた。以来、サンタ・ムエルテ信者たちは、メディアや非信者たちからいわれのない非難を受けながら、隠れるようにして信仰の灯を守り続けている。

こうした近年の状況を考えれば、今回のメラス家の事件もひょっとして同様に麻薬がらみなのではないか、という疑問が当然に湧く。しかし警察は、その可能性を否定するわけでも肯定するわけでもなく、極めて慎重かつあいまいな表現に終始している。

警察にしてみれば、麻薬ビジネスとの長びく闘いにおいて、少しでも有利な状況を作りたいはずである。かりに今回の事件の背景に、以前と同様サンタ・ムエルテ信仰を隠れ蓑にしようとする麻薬業者の暗躍があったとしても、さしあたりはその方針での捜査はしないふりをしているのではないか。事実はさておき、狂信的カルト集団の暴走として片づけておき、麻薬業者を少しでも油断させておいて証拠を集め、逮捕に持ち込みたいと考えているのではないか。あるいは、麻薬業者たちとの駆け引きにおいて、表沙汰にできないもっと複雑な事情があるのかもしれない。

そもそも、家族関係を非常に重んじるメキシコで、身内の子どもを「生贄」として殺すというもどこか不自然に思われる。メラス家の人々は本当に殺害犯人なのだろうか、あるいは殺害は事実

としても、その動機は本当にサンタ・ムエルテなのだろうか？ 現時点での警察発表と報道には、こうしていくつもの疑問がついてまわる。

ともかく今は、3人の被害者を心から悼むとともに、メキシコ全土のサンタ・ムエルテ信者たちと一緒に、しばらく事態の推移を見守るしかない。麻薬問題もあり、警察の捜査とメディアの報道には一定の操作性があるものと心して、注意深く観察を続けなければならないと考えている。

(2012年4月5日 ©加藤薫)